

第52回言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会報告 「外国語教授法と誤用の分析」

2022年7月9日に「外国語教授法と誤用の分析」をテーマに、以下の要領で全体研究会が開催された。参加者は14人であった。以下に報告をする。

- ◆ 開催日時 2022年7月9日（土）10：30～12：00
- ◆ 開催場所 甲南大学2号館1階グローバルゾーン・ポルト
- ◆ 次第
 - 全体司会 全学共通教育センター教授・国際言語文化センター兼任研究員 金 泰虎
 - 第一部
 - 10：30 開会の挨拶 国際言語文化センター所長 佐藤 泰弘
 - 10：35 ≪基調講演≫
 - 日韓対象言語学に基づく誤用の分析－外国語教授法の観点から－
 - 天理大学国際学部教授 金 善美
 - 11：35-11：50 質疑応答
 - 11：50-11：55 まとめ
 - 全学共通教育センター教授・国際言語文化センター兼任研究員 谷守 正寛
 - 11：55-12：00 閉会の挨拶
 - 全学共通教育センター教授・国際言語文化センター兼任研究員 中村 典子

講演者の金善美氏は、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程・博士後期課程（言語情報科学分野）を修了し、専門分野を日韓対照言語学と韓国語教育としている。現在の研究テーマは終助詞に関する日韓対照を中心とした類型論的研究である。韓国語と日本語の対照研究を行うことによって、韓国語と日本語の共通点と相違点を明確にし、その研究成果を体系的な言語理論の確立と、学生にとってより分かりやすい韓国語教育という二つの側面において生かすことを目指している。

基調講演は、演題「日韓対照言語学に基づく誤用の分析－外国語教授法の観点から－」として、金善美氏より講演をいただいた。その講演の内容を講演者の発表原稿にもとづいて、以下にまとめる。

韓国語と日本語は文法体系上多くの類似性を持っているものの相違点もあるため、両言語の母語話者が互いの言語を学習する場合には、従前よりの日韓対照言語学の研究成果を

活用した教授法が有効となる。その上で作文や表現法、翻訳や通訳の授業では誤用分析を行うことによって目標言語に対する理解を的確かつ効率的に高めることができる。

初級用の文法を一通り終えた学習者や中・上級レベルの学習者であっても、誤用分析の教授法は有効である。週に1～2回の授業でしか韓国語に接しない学習者の場合は、その作文や発言の中で見出される誤用を指摘し分析する誤用分析が、両言語への理解を高めるだけでなく、効率的に語学力を向上させるのである。

誤用分析を行う際は、教師は「この方が自然だから覚えなさい」という指導ではなく、その誤用と関係のある文法知識を提示し、さらに、文法的側面から文法的に容認可か不可であるかの境を明らかに示すことも、表現の幅を広げる上で役立つ。そして、文法性の判断条件としては、次の三段階を踏む必要がある。

- (1) 単文の文法性と接続形式の文法性を決める。
- (2) 文法的であり意味伝達上問題がない場合、韓国語としてより自然かどうか、使用頻度はどうかをみる。
- (3) 複数の母語話者によって容認度を決定する。

講演では、主に助詞を中心に間違いや不自然な表現について説明がなされた。「は」と「が」にあたる助詞の使い分け（新情報を表すか旧情報を表すかによって区別する）、状態述語に使われたり好悪・希望の対象や主体尊敬を表したりする「が」のさまざまな意味と用法について説明があった。

また、日本語では「と」が仮定条件と確定条件の両方に出現するのに対して、韓国語では「と」に相当する語が確定条件には使われないことから、韓国語を学習する日本語母語話者の誤用が目立つという。

以上の説明では、実際の誤用文を使って、なぜ間違いなのか、間違いを起こすのかといった分析について詳細に例証された。

最後に、質疑応答では参加者からの質問は特になかったが、司会者からは条件の表現の違いについて質問があり、日韓両言語の違いについての知見を共有することができた。

(文責：谷守正寛)